九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[003]臺灣演習林植物調査

初島, 住彦
九州帝国大学助手

https://doi.org/10.15017/14202

出版情報：九州帝国大学農学部演習林報告. 3, pp.1-257, 1933-06. 九州大学農学部附属演習林
バージョン：
権利関係：

3. 總雨量は一ヶ年の降水量とす。

4. 最多量とは一ヶ月の最多降雨量を示す。

5. 乙地は月二回の觀測にして温度觀測設備なし。

最近十箇年平均雨量表　甲地＝龜山觀測所（演習林下流二里）　乙地＝坪林觀測所（演習林上流三里）

種別		月平均雨量		一日最多量		月平均降雨日數		月最多降雨日數	
觀測地		甲地	乙地	甲地	乙地	甲地	乙地	甲地	乙地
月別	月	耗	耗	耗	耗	日	日	日	日
	1	161.6	136.9	77.8	49.0	19	16	23	22
	2	214.4	161.5	61.8	57.1	19	17	23	26
	3	189.6	158.7	66.6	92.1	17	15	24	20
	4	221.5	211.0	112.2	144.0	16	14	22	25
	5	246.2	315.6	145.2	185.7	19	17	大正十年 29	24
	6	484.4	449.1	159.3	183.6	21	17	24	23
	7	311.6	333.0	187.0	248.5	16	12	23	19
	8	518.6	538.1	349.0	大正三年 515.0	16	13	21	18
	9	364.5	448.0	233.0	440.1	15	14	23	18
	10	415.7	498.3	大正七年 457.5	362.1	18	19	22	大正七年 29
	11	190.1	220.3	65.9	192.1	22	18	25	24
	12	173.5	183.1	42.2	72.8	19	20	24	23
	計	3,491.7	3,653.6			217	192		

年平均降雨量　甲地　三、六五三、耗六　乙地　三、四九一、耗七

年最多降雨量　甲地　四、七一九、耗三（大正十三年）　乙地　四、六九三、耗六（大正元年）

年平均降雨日數　甲地　一九二日　乙地　二一七日

年最多降雨日數　甲地　二二五日（大正六年）　乙地　二七〇日（大正二年）

（二）臺灣演習林植物の特徴

臺灣に於ける森林は極めて複雜にして南北に於て、東西に於て、平地及高地帶に於て、海岸に於て、內陸に於て其差著しく、多種多樣にして種々錯雜なる森林帶を形成し其複雜なること、樹種の豐富なることに於て本邦乃至世界の島嶼に於て稀に見る現象を呈す、即ち此の森林帶を組成する原因は種々あるべしと雖も第一先天的要素たる地質學的素因及地理學的素因、第二後天的素因に歸せざるべからず。

而して此等二要素は全島概して温暖にして、夏期と雖も極端なる乾燥炎くが如き暑熱を受けず、冬期と雖も寒冷のために枯死するもの少きを以て常に繁茂旺盛を極

め爲めに分布上全能力を發揮し特殊的發達をなす所以なり、其の特殊的諸原因を列記すれば次の如し。

一、東亞大陸の緣邊に沿ふて發達し南支那との距離甚だ接近し同地方と地質學的連鎖ありて海底極めて淺し。

二、曾て氷河の本島を覆ひしこと極めて少なかりき。

三、地質學的には南隣ヒリツピン群島と稍々關係少し。

四、島の中央部は北回歸線を東西に横へ、爲に全島大概ね温暖なり。

五、一萬尺を凌駕する中央山脈の大連塀は島の中軸より稍々東に偏して南北を縱貫し、左右は之に沿ふて尙高山峻岳を起し之より多くの溪谷を派出して森林の成生を區分す。

六、潮流の影響甚大にして暖流は南岬、鵞鑾鼻を突き其の本流は東海岸に沿ひて北上し、支流は西海岸に沿ひて流れ澎湖島附近より臺灣海峽に入り、支那大陸の沿岸に至り寒流は北岬、富貴角を突き、其の本流は西海岸に沿ひて南下し澎湖近海に於て消滅し、支流は東海岸に沿ひて三貂角附近に於て暖流と合し消滅す。

七、本島に來る暖流の上流地方は世界植物の寶庫と稱せらるゝ馬來多島海なり。

以上の素因相錯綜し海岸に或ひは高地帶に於て特殊の植物帶を形成す。

臺灣現在の植物は三千七百三十七種（大正十二年調査）にして次の要素により成立す。

分布	種類數	分布率
固有	1.605	42.95 %
日本	870	23.28
南支那	848	22.69
中部支那	698	18.68
馬來	675	18.06
印度	655	17.53
北支那	240	6.42
ヒマラヤ	171	4.58
濠州	119	3.18

而して此等植物は地理學的に觀察する時は、臺灣植物帶はエングラー氏に依れば下部界は東亞亞熱帶及び南部暖帶區に編入せられ、上部界は季節風帶區に編入せられ工藤祐舜氏は更に六小區を設定して北部小區、中部小區、恒春小區、紅頭嶼及火燒島小區、澎湖島小區に分劃せり。金平亮三博士は臺灣全島を一括して溫暖區として取扱ふを適當なりと主張せられ、又佐々木舜一氏に依れば本島及附屬島嶼を一括して東亞溫暖區となし更に高地帶小區と平地帶小區に區別し、平地帶小區を更に區別して北部臺灣區、南部臺灣區、熱帶海流帶區の三亞小區に分類するを至當とし、尙紅頭嶼、火燒島は一括して一小區を設定するも可ならんと、更に高地帶小區は熱帶的暖帶林、暖帶林、溫帶林、寒帶林に分類し、垂直的分布を考慮區別し其の最下部に位する熱帶的暖帶林は水平的分布に於ける北部臺灣亞小區、南部臺灣亞小區、熱帶海流帶亞小區、紅頭嶼、火燒島亞小區に一致するを見ると。

暖帶林は北部に於ては漸次昇騰して七百米を最低部とし、其の上部は二千米に達し溫帶林に接するを見る。

溫帶林は千五百米附近より發達し、二千米に於て純帶を現はし三千米附近に於て寒帶林に推移す。

以上の理由によりて本演習林の森林を考慮すれば、水平的には北部臺灣區に屬し垂直的には熱帶的暖帶林に屬するものなるを知る。

（三） 演習林に於ける植相概說及び主なる群叢

演習林の低地に於ける植相

本區域は演習林事務所附近並に後坑子溪に沿ひたる低地にして茶園、畑地、水田等として利用せらる。

茶　園

本區域は主として陽性の草本多く、ヒメオトギリ、タイワンコスミレ、ナガサハスミレ、ワラビ、コバノウシノシツペイ、スズメノナガビエ、スズメノコビエ、イ